

7/18 SAT. 25 SAT. 26 SUN.



©K.Miura

Jonathan Nott

Conductor

ジョナサン・ノット

[指揮／映像出演]

Music Director

音楽監督

イギリス生まれ。フランクフルトとヴィースバーデンの歌劇場で指揮者としてのキャリアをスタートし、ルツェルン交響楽団首席指揮者兼ルツェルン劇場音楽監督、アンサンブル・アンテルコンタンポラン音楽監督、バンベルク交響楽団首席指揮者を経て、2014年度より東京交響楽団第3代音楽監督。2017年からはスイス・ロマンド管弦楽団の音楽監督も務めている。その抜群のプログラミング・センスに加え、古典から現代曲まで幅広いレパートリーを誇り、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、コンサートヘボウ管、シカゴ響等のオーケストラ、ザルツブルク音楽祭、ルツェルン音楽祭、BBCプロムス等の音楽祭へ客演している。ウィーン・フィルやベルリンフィルとの録音のほか、東京交響楽団とはオクタヴィアレコードより6つのCDをリリースしている。2020年3月第32回ミュージック・ペンクラブ音楽賞「オペラ・オーケストラ部門」を東京交響楽団とともに受賞した。

Well known for the power, vigour and clarity of his interpretations of Mahler's works, Jonathan Nott has been music director of the Tokyo Symphony Orchestra since 2014. He was also appointed as Music and Artistic Director of the Orchestre de la Suisse Romande as from 2017 and had been principal conductor of the Bamberg Symphony Orchestra for 16 years. Mr. Nott began his career at the opera houses in Frankfurt and Wiesbaden where he conducted all major works of the repertoire including Wagner's complete Ring cycle. Mr. Nott has a large catalogue of highly acclaimed recordings by the Orchestre de la Suisse Romande, the Bamberg Symphony Orchestra, the Berlin Philharmonic, and the Vienna Philharmonic Orchestra as well as recordings with the Tokyo Symphony Orchestra. In 2020, Mr. Nott and Tokyo Symphony Orchestra won the Best Orchestra of the 32th Music Pen Club Music Award.

7/18 SAT.

ベンジャミン・ブリテン (1913 ~ 1976)

フランク・ブリッジの主題による変奏曲 作品10

ロンドンの王立音楽大学で受けた授業に満足できなかったのであろう。自らの師と仰ぐのは、最初に作曲を習ったフランク・ブリッジ (1879 ~ 1941) であるとブリテンは述べている。14歳から始まった師弟関係は大学時代もプライベートで続き、当時としては進歩的なシェーンベルクやベルクの音楽に強い興味をもつようになったのもブリッジのお陰だった。そんな恩師の弦楽四重奏曲《3つの牧歌》(1906) の第2曲を主題とする変奏曲を構想したのは、1932年のこと。ピアノ曲として計画されるも、この時は完成に至らず。1937年5月、指揮者ボイド・ニールが3ヶ月後のザルツブルク音楽祭で初演する新作を必要としたため、映画音楽で共演していたブリテンに急遽依頼。こうして過去の構想を引っ張り出すことになったのだ。音楽祭での初演は大成功し、ブリテンの名が国際的に知られるきっかけとなった。

そもそもブリテンは、変奏曲を得意とする作曲家だ。最も知られる作品《青少年のための管弦楽入門》もその実態は「ヘンリー・パーセルの主題による変奏曲とフーガ」であるし、パッサカリアやシャコンヌといった変奏を伴う曲種も多い。オペラ全体を変奏曲にしてしまった『ねじの回転』のような作品まで存在しているほどである。同じイギリス生まれの変奏曲として有名なエルガーの《エニグマ変奏曲》は、個々の変奏がエルガーの友人たちを描いたことで知られるが、ブリテンがブリッジに捧げた本作は、個々の変奏で師の魅力を多面的に描いていく。

緊張感の高い序奏の後、弦楽四重奏で提示されていくのが前述した主題である。ヴィオラ、チェロ、コントラバスによる和音から始まる第1変奏：アダージョは「誠実さ／奥深さ」を、第2変奏：行進曲では「気力」、第3変奏：ロマンスは「チャーミングさ」、第4変奏：イタリア風アリアは「ウイット」、なかばでヴァイオリン独奏が活躍する第5変奏：古典的なブルーレは「ユーモア」、第6変奏：ウィーン風ワルツでは「伝統的」なところを、第7変奏：無窮動は「熱意」、第8変奏：葬送行進曲は「活力」、第9変奏：聖歌は「威厳」を描いている。最後の第10変奏：フーガと終曲では、前半で師の「技量」を、主題が二長調となって回帰する後半部で師弟の「親愛さ」が表現されている。ブリッジにとって本作がどれほど嬉しい贈り物であったのか、想像に難くないだろう。

小室敬幸 TEXT by Takayuki Komuro

作曲：1937年

初演：1937年8月25日、ヒルフェルスム(オランダ)。ボイド・ニール指揮、ボイド・ニール・オーケストラ。

舞台初演：1937年8月27日、ザルツブルク。ボイド・ニール指揮、ボイド・ニール・オーケストラ。

編成：弦5部

7/18 SAT.

アントニン・ドヴォルザーク(1841～1904)

交響曲 第8番 ト長調 作品88

稀代の旋律「作家」ドヴォルザークの人気作を聴く。

ボヘミアの森の描写に、摩訶不思議な郷愁を誘うスラヴの調べ、得意の変奏技法など、この交響曲には多くのキーワードがある。チェロ、ホルン、フルートの活躍も際立つ。終楽章の開始部にはトランペットのファンファーレも添えられた。そして親しみやすいメロディの数々。作曲家自ら「森の鳥たちの歌に心奪われ、最高に美しい旋律が生まれそう」と出版社への手紙に記したト長調のシンフォニーは、ドヴォルザークが40歳代の後半に紡いだ会心作のひとつである。にもかかわらず、1878年以来、懇意にしてきたドイツの出版社ジムロックから初版楽譜は刊行されなかった。ジムロックが才能あふれるドヴォルザークに求めたのは、連弾曲や歌曲、あるいは民謡や舞曲を背景とした小品で、構築的な交響曲ではなかった。それでこの交響曲はイギリスのノヴェロ社から刊行される。30年ほど前まで「イギリス」なる愛称が目についたのは、そのためである。音楽とは何の関係もない。

ただドヴォルザークが1884年の春以降、ロンドンのフィルハーモニック協会などの招きで大英帝国の首都ロンドンを都合9回訪問し、自作の宗教曲「スターバト・マーテル」を披露したほか、1895年には二短調交響曲(現在の交響曲第7番)を自らのタクトで初演するなど、絶大な人気を誇ったことは歴史的事実である。国際都市ロンドンでも名声を博した「チェコ国民楽派」のスター作曲家ゆえに、ドヴォルザークは後にニューヨークから招かれるのだ。前述のボヘミア、スラヴ色とともに、凝った創りやシンフォニックな構成も聴き手を捉えて離さない。彼は「それまでに書いた交響曲とは違う方法論で主題を展開させたい」という希望を抱いていた。

曲は1889年の夏、プラハの南西50キロほどのところにあるヴィソカー村でスケッチが開始され、1890年2月にプラハで初演された。管弦の調べは、いつになくみずみずしい。初演の翌年にはハンス・リヒター指揮のウィーン・フィル定期でも演奏された。その公演を、かつてドヴォルザークの才能を作曲の審査会で見出した恩人ブラームスが聴いている。ブラームスは「素晴らしいアイデアに溢れているが、副次的で繊細な美が多すぎるのでは」と「不満」を述べたと伝えられる。しかしそれは賛辞の裏返しだろう。ワルツ風の第3楽章、アレグレット・グラツィオーソが素晴らしい。ドヴォルザークが紡いだ、最高に魅惑的な音楽のひとつがここにある。

奥田佳道 TEXT by Yoshimichi Okuda

作曲: 1889年8月～11月

初演: 1890年2月2日 プラハ・ホルドルフィナム ドヴォルザーク指揮プラハ国民劇場管弦楽団

編成: フルート2(ピッコロ1持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン1持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、バス・チューバ1、ティンパニ2、弦5部